０１・下宿先のリビングのこたつで、だらだら×ぬくぬく攻められ耳舐め

とある年の冬。
十二月十二日。十五時半ごろ。
日本のとある、かなり寒い地域の地方都市『こいしかわ市』。
天気は晴れ。気温は二度程度。
他の地域の人には驚かれそうな話だが、この街において、十二月、プラス気温になる日は、『温かい』と認識される方の日だ。
なので、主人公もちょっとホッとしている。

場所は、主人公の下宿先であり、みつみが管理人を務める建物『はちみつ荘』。
その一階リビングにて……主人公はこたつに入り、首だけ出してくうくう寝ている。
温かくて気持ちよくて、とにかく眠いのだ。

〈主人公〉
「……」

SE1　外の環境音
【最初から最後まで流す】
【繰り返して流す】
【部屋の外の音を、部屋の中から聞いている】
【0―5秒ほど流してSE3】
【その後、音量が小さくなる】
【トラック終了まで流し続ける】

SE2　部屋の環境音（暖房の音）
【最初から最後まで流す】
【繰り返して流す】
【部屋の外の音を、部屋の中から聞いている】
【0―5秒ほど流してSE3】
【その後、音量が小さくなる】
【トラック終了まで流し続ける】

SE3　律の足音
【最初から最後まで流す】

【とても遠い場所から、だんだん近づいてくる】
【3メートルほど離れた位置で止まる】

そこへ、下宿仲間の『五十嵐　律（いがらし　りつ）』がやってくる。
律は先ほど帰宅したのだが、これからまた大学に戻るようだ。

律、廊下から主人公に話しかける。

▲　ボイス加工あり
【3メートルほど離れた位置から聞こえる】
●正面　30センチ
〈律〉
「【主人公に話しかけている。
廊下から、リビングの主人公に呼びかけている。
『明るくノリのいい、社交的なオタク女子』という感じで。
律は主人公よりも年上だが、同世代の友人のような気さくさで接する】
ほいじゃ行ってくるねー」

〈主人公〉
「……ん……？」

しかし主人公は、その呼びかけに機敏に反応する事ができず、こたつの中でちまちまと小さく動くのみだ。
もちろん、これからまた研究に戻るのだろう律を、見送りたい気持ちはある。
だが、身体が思ったように動いてくれないのだ。
主人公は一度眠ると、再起動に苦労するタイプなのである。

▲　ボイス加工あり
【2メートルほど離れた位置から聞こえる】
●正面　30センチ
〈律〉
「【主人公に話しかけている。
遠くから主人公に呼びかけているイメージで。
『明るくノリのいい、社交的なオタク女子』という感じで。
主人公は今日、これからアルバイトで、一時間後には出発する予定である。
にもかかわらず、すっかり寝入っている事を、律は心配している】

おーい。起きてるぅ？
今日、五時からバイトでしょー？」

〈主人公〉
「お。起きてるー……」

SE４　主人公がこたつで身体を動かす音
【最初から最後まで流す】
【少し大きめの音量で流す】

▲　ボイス加工あり
【２メートルほど離れた位置から聞こえる】
●正面　３０センチ
〈律〉
「【ちょっと呆れつつも、優しく。
『面倒見のいいお姉さん』という感じで】
寝てんじゃーん」

主人公がもぞもぞと身体を動かし手を挙げると、律が困ったようにくつくつと笑う。
主人公としては『大丈夫。自分は起きている』というアピールをしたかったのだが、律には余計不安なものに映ったらしい。

▲　ボイス加工あり
【2メートルほど離れた位置から聞こえる】
●正面　30センチ
〈律〉
「【ちょっとおどけた様子で。
『律お姉さん』とは律自身の事】
律（りつ）お姉さんがいなくても。ちゃんと起きるんだぞー」

〈主人公〉
「……だぁいじょうぶ。任せといてー……」

▲　ボイス加工あり
【2メートルほど離れた位置から聞こえる】
●正面　30センチ

〈律〉
「【主人公に話しかけている。
遠くから主人公に呼びかけているイメージで。
『明るくノリのいい、社交的なオタク女子』という感じで。
内心『大丈夫とは言っているけど、本当かな？　本当に起きれるのかな？』と思いつつ、
ひとまず明るく出ていく】
あーい。
じゃあ行ってきまーす」

〈主人公〉
「いってらっしゃーい……」

主人公、ぬっと上げた右手をひらひらと振り、精一杯の見送りをする。
律はそれを見届けると、ぱたぱたとリビングを離れていった。

SE5　律の足音2
【最初から最後まで流す】
【だんだん遠ざかり、フェードアウトする】

SE6　律が玄関の扉を開ける音
【最初から最後まで流す】
【とても遠くで、ぼんやり聞こえる】

SE7　律が玄関の扉を閉める音
【最初から最後まで流す】
【とても遠くで、ぼんやり聞こえる】

SE8　律が玄関の扉を施錠する音
【最初から最後まで流す】
【とても遠くで、ぼんやり聞こえる】

こうして、はちみつ荘には主人公のみが残された。
そしてその主人公は、たった今警告されたにもかかわらず、また寝ようとし始める。
こともあろうに、よく寝るためのポジションの調整まで行っている。

SE9　主人公がこたつでごろごろする音

【最初から最後まで流す】

ＳＥ９が流れた後、２０秒ほど環境音のみになる。

そのまま、数十秒が経過した頃……。

ＳＥ１０　みつみが玄関の扉を開錠する音
【最初から最後まで流す】
【とても遠くで、ぼんやり聞こえる】

ＳＥ１１　みつみが玄関の扉を開ける音
【最初から最後まで流す】
【ＳＥ５と同じ音】
【とても遠くで、ぼんやり聞こえる】

ＳＥ１２　みつみが玄関の扉を閉める音
【最初から最後まで流す】
【ＳＥ６と同じ音】

【とても遠くで、ぼんやり聞こえる】

SE13　みつみが玄関の扉を施錠する音
【最初から最後まで流す】
【SE7と同じ音】
【とても遠くで、ぼんやり聞こえる】

また玄関の扉が開く。
誰かが帰ってきたようだ。

〈主人公〉
「……！」

流石の主人公も、今度こそ起き上がり『おかえり』を言うべく動き出す。
だが……そうする前に、帰宅者の方から声をかけてきた。

みつみ、玄関から話しかける。

▲　ボイス加工あり
【１０メートルほど離れた位置から聞こえる】
●正面　５０センチ
「【家にいる全員に話しかけている。
遠くからリビングにいる人間に呼びかけているイメージで。
誰がいるかまでは把握していない】
ただいまー。
【少し早口に、独り言っぽく。
外がとても寒かったので】
はー寒い。寒かったぁ」

〈主人公〉
「……！　みつみお姉ちゃん、おかえり……！」

ＳＥ１４　主人公がこたつから起き上がる音
【最初から最後まで流す】

ＳＥ１５　みつみの足音

【最初から最後まで流す】
【とても遠くから、だんだん少し遠くまで近づいてくる】

その帰宅者とは、主人公の恋人である『蜂谷　みつみ（はちや　みつみ）だ。
主人公はわかりやすくぱぁっと顔を明るくすると、彼女を迎えるべく、まずは座った状態で両手を振った。

主人公は座り、みつみは立った状態で話している。

▲　ボイス加工あり
【2メートルほど離れた位置から聞こえる】
●正面　50センチ　【80センチほど上】
「【ここからトラック終わりまで、すべて主人公に話しかけている。
リビングの入り口から、こたつにいる主人公に話しかけている。
明るく上機嫌で。
主人公がいて嬉しいので】
ただい、ま♪
【少し不思議そうに。

『りっちゃん』とは、以後、律の事。
まだ律もいるはずだと思っていたので。
『玄関に残った靴の状況を見て、誰がいるか判断する』といった事はしていなかった】
……あれ？　一人だけ？　りっちゃんは？」

〈主人公〉
「りっさんなら今出てった。会わなかった？」

律の動向を伝えると、みつみは残念そうにする。
出発のタイミングからして会えそうなものだったが、そうはいかなかったらしい。

SE16　みつみの足音2
【最初から最後まで流す】
【少し遠くから、だんだんすぐそばまで近づいてくる】

▲　ボイス加工あり
【2メートルほど離れた位置から聞こえる】
●正面　50センチ　【80センチほど上】

「【少し驚いて。
少し残念そうに】
え。会わなかったー。
すれ違っちゃったねぇ」

〈主人公〉
「どこ行ってたのー？」

そんなみつみはコートを着たままリビングに入ると、主人公のそばまでやってきた。
そしてそのまま、質問に答えてくれる。

●正面　５０センチ　【８０センチほど上】
「【明るく穏やかに。
主人公の質問に答える。
『本当は午前中買い物に行った際、ついでに銀行に寄る予定だった。しかし、忘れてしまったので、先ほどもう一度出かけて支払ってきた。結果、二回外出する事になってしまった』という意味で言っている】
んー？　銀行に支払ーい。

さっき買い物行った時に寄るの忘れちゃってね。
もっかい出る事になっちゃった」

〈主人公〉
「おや。それはお疲れぇ」

SE17　みつみがコートを脱ぐ音
【最初から最後まで流す】
【次の『みつみ』のセリフと重ねて流す】

●正面　50センチ　【80センチほど上】
「【再びとても寒そうに。
また、これからアルバイトで外へ行く主人公に、着こんでいくように伝える】
はー外寒かったぁ。
あなたもバイト行く時、あったかくして行きなよ」

〈主人公〉
「んー。ありがとー。お茶でも飲むー？」

なるほど、だから出かけていたのか。

主人公、みつみの外出理由を理解したのち『それでは、寒がっているみつみ姉ちゃんに、温かいお茶でも出そう……』と、立ち上がろうとする。

だが、みつみはなぜかそれをそっと断ると、なぜかにやにやしながら近づいてきた。

ＳＥ１８　みつみの足音３
【最初から最後まで流す】
【だんだん近づいてくる】

みつみ、少し近づく。

●正面　３０センチ　【８０センチほど上】
「【にこにこと上機嫌で。
主人公と二人きりなのが嬉しいので。
みつみはこのまま、主人公と一緒に並んでこたつに入りたいと思っている。
なので、飲み物に関しては優しく断る】

んー？　どういたしまして♪
あーでも、飲み物はいいかなぁ。
それよりぃ……」

〈主人公〉
「ん？」

みつみ、言いながらこたつに入る。

ＳＥ１９　みつみがこたつに入る音
【最初から最後まで流す】
【０―１秒ほどまで流して、その後、次の『みつみ』のセリフと重ねて流す】

●正面　３０センチ
【８０センチほど上から、０センチ上（元の高さ）に戻るように動きながら】
「【にやにやと嬉しそうに。
こたつに入って主人公の隣に座ろうとする】
むふふ。あたしも入るぅ」

〈主人公〉
「お！　どおぞどおぞ」

こうして主人公とみつみは、並んでこたつに入る形になった。
何も並ばなくてもいいだろう、向かいも斜めも空いているだろうと言われそうなところだが、二人はこれがいい。
恋人同士だからだ……。

●正面　３０センチ
「【嬉しそうにしみじみと。
温まれるし、主人公の隣に来られたので】
はー、あったかぁ！
冬はやっぱこたつに限るねぇ」

〈主人公〉
「でしょー？　わたしももう出たくなーい」

●正面　３０センチ
「【明るく楽しげに笑う】
はっはっは。わかるぅー。
あたしも出たくなーい。
ずっとここに居るぅ」

〈主人公〉
「居なされ居なされ」

主人公が大げさにぺたっとこたつテーブルに胸をくっつけると、みつみが微笑んだ。
二人の付き合いは長い。
これだけで……主人公は、みつみが今何を考えているのか、なんとなくわかってしまった。

●正面　３０センチ
「【明るく楽しげに笑う】
ふふふ❤」

SE20　みつみがこたつで動く音
【最初から最後まで流す】
【だんだん近づいてくる】

みつみ、『正面30センチ』の距離のまま、『無声音ささやき』をする。

●正面　30センチ　『無声音』ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【ひそひそと。少し悪戯っぽくささやく】
……ねぇ。
今日、何時（なんじ）から？」※

〈主人公〉
「んー……？　いつもと一緒。五時だよ」

みつみ、通常の話し方に戻る。
しかし、その声はどこか嬉しそうに、にやにやしている。

●正面　30センチ

「【嬉しそうに。
少し含みのある感じで笑う】
……へぇ〜。ふふ❤
……そっか。そっかぁ♪」

〈主人公〉
「……そぉよぉ？」

みつみ、少し距離が近づく。

●正面　15センチ
「【にやにやと嬉しそうに。すこしわざとらしく。
みつみは今、ほかの寮生がいないこの好機に、主人公といちゃいちゃしたいと思っている。だが、それを正直に言うのは少し恥ずかしい。
なので『主人公がいちゃいちゃしたがっている』という体で話を進めようとしている】
そっ、かぁ〜。
あー。
もしかして。『いちゃいちゃしても大丈夫そう』って思ってるぅ？」

〈主人公〉
「えー……？」

主人公、にやにやするみつみを、自分自身もまたにやにやしながら見上げる。
今にもキスしそうな雰囲気だ……。

●正面　１５センチ
「【ぼそっと。
ちょっとニヤニヤした感じで】
……私は。思ってるけどね？」

〈主人公〉
「……❤」

みつみ、さらに近づく。
二人、どちらからともなく顔を近づけて、キスをする。

●正面　0センチ
「【※3回※　キスする。
軽く唇が触れるだけのキス】
ん……ちゅ❤
ちゅ……ちゅ❤
「【※息づかいのみ※　で表現する。
再びキスを始めようとしている】
ん……っ❤
【※3回※　キスする。
軽く唇が触れるだけのキス】
ちゅ。……ちゅ。ちゅ❤」

〈主人公〉
「……いいの？」

●正面　0センチ
「【主人公の質問に答える。
少し恥ずかしそうに、でも、嬉しそうに】

うん……❤　きっと……大丈夫。
【ここから『今えっちしても大丈夫そうな根拠』を述べる。
『麻里』と『かなえ』とは、他の下宿生の事。
現在下宿生は、主人公と律、麻里、かなえの四名である】
りっちゃん学校だし、麻里（まり）ちゃんバイトそのまま行くって言ったし。
かなえちゃんも、遅くなるって言ってた。
【少し恥ずかしそうに、でも、嬉しそうに】
だから……あたし達だけだよ」

〈主人公〉
「……へぇ〜……。
そっ、かぁ。
そぉ、なんだぁ……」

●正面　0センチ
「【くすくすと嬉しそうに。
このままこたつえっちする方向に傾いている主人公に、ダメ押しする感じで】
そうだよ❤」

みつみ、『正面０センチ』の距離のまま、『無声音ささやき』をする。

●正面　０センチ　『無声音』ささやき　※マークのセリフまでささやく

「【ひそひそと。

※特に聞き手をドキッとさせる感じでお願いします※】

だから……大丈夫……❤」※

みつみ、言うと、主人公をそっと押し倒す。

ＳＥ２１　みつみが主人公を押し倒す音

【最初から最後まで流す】

【だんだん近づいてくる】

みつみ、主人公を押し倒すと、ゆっくりと覆いかぶさって、右耳を舐め始める。

こうして主人公は……みつみのペースに飲まれ、彼女の好きにされていく事となる。

●右　０センチ　『耳舐め』

「【※しばらく※　耳舐めをする。
まだ比較的穏やか。
まずは軽く耳の外側を舐めていく。
時折キスや、休む呼吸を交えながら舐めている】
あん……む……❤
ちゅ❤
ふう……ふう……ふぅ……❤
あぁんむ……❤　れろっ……❤
ちゅ。ちゅ。ちゅ❤
【※3回※　特にゆっくり呼吸する。
一度耳舐めを休んでいる。
興奮し始めている感じ。
この後耳舐めが再開する】
ふー……。ふー……。ふー……っ❤
【※しばらく※　耳舐めをする。
まだ比較的穏やか。
耳の穴の方へ移行していく。
時折キスや、休む呼吸を交えながら舐めている】

ちゅ❤
あんむ……れろ……っ……ぴちゃっ❤
れろ……れろっ……ちゅ❤
ふー、ふー、ふー……❤
ちゅ❤　……ちゅ。ちゅっ❤
れーろっ……れろ❤
【※1回※　長めに、軽く耳を吹く。
主人公をびくっと、大きく反応させたい】
ふー……❤」

〈主人公〉
「ぁ……！」

みつみ、一度耳舐めをやめ、嬉しそうに主人公に話しかける。
にやにやと嬉しそうに目を細めて、すっかり主人公の反応を楽しんでいる。

●右　0センチ
「【にやにやと嬉しそうに。

自分の狙い通りになったのが嬉しいし、まんまと反応した主人公が可愛らしいので】
あ〜……❤　ピクってしたぁ……❤
【※1回※　耳にキスする】
ちゅ❤
【にやにやと嬉しそうに】
か〜わい〜……❤
【※1回※　耳にキスする】
ちゅ❤」

〈主人公〉
「もぉ……からかうなぁ……❤」

●右　0センチ
「【にやにやと嬉しそうに。
自分の狙い通りになったのが嬉しいし、まんまと反応した主人公が可愛らしいので】
からかってなーいよー？
だって本当に可愛いもん。
【※3回※　耳にキスする】

ちゅ❤
ちゅ❤
ちゅっ……❤」

〈主人公〉
「あぁっ……❤」

●右　0センチ
「【にやにやと嬉しそうに。
自分の狙い通りになったのが嬉しいし、まんまと反応した主人公が可愛らしいので】
ふふふふふっ❤
【※1回※　耳にキスする】
ちゅ❤」

みつみ、『右0センチ』の距離のまま、『無声音ささやき』をする。

●右　0センチ　『無声音』ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【ひそひそと。

※特に聞き手をドキッとさせる感じでお願いします※】
好きだよ……❤
気持ちいのしよ……？　※
【※1回※　耳にキスする】
ちゅ❤」

〈主人公〉
「あぁっ……❤」

主人公、観念したように小さく喘ぐと、かすかに頷いて身体を差し出す。
こうなると、もう、どう転んでも主人公はみつみの思うがままだ。
……主人公が、そうなりたいと思っているからだ。

●右　0センチ
「【※6回※　特にゆっくり呼吸する。
比較的穏やかに興奮している感じ】
はー……はー……はー……❤
ふぅ……ふぅ……ふー……❤

【※1回※　耳にキスする】
ちゅ❤
【※1回※　長めに『ごく軽く』耳を吹く。
さっきよりも軽く】
ふーー……❤」

こうしてみつみは、右耳舐めを再開する。
ほかの寮生が帰ってくる心配が比較的薄いとはいえ、その行為はあまりにも大胆で、主人公の興奮は強く煽られる。

●右　0センチ　『耳舐め』
「【※しばらく※　耳舐めをする。
まずは軽く耳の外側を舐めていく。
まだ比較的穏やか。
時折キスや、休む呼吸を交えながら舐めている】
んっ……く……❤
はぁんむ……❤　ちゅ❤
れろ……れぇろ……れろっ……ちゅ❤

れろれろ、れろれろ。
れろれろ、れろれろっ……ちゅ❤
【※1回※　長めに『ごく軽く』耳を吹く。
さっきよりも軽く】
ふーー……❤
【※1回※　耳にキスする】
ちゅ❤
【※しばらく※　耳舐めをする。
段々深く、激しくなっていく。
先ほどまでよりも深く、耳の穴の中を積極的に舐めていく。
時折キスや、休む呼吸を交えながら舐めている】
あん……む……❤
ちゅ❤
れーろ……れーろ……れーろ……❤
ぴちゃぴちゃ、ぴちゃぴちゃ、じゅるっ……❤
はぁんむ……ぴちゃっ❤
れーろ、れーろ、れーろ。
えーれ、えーれ、えーれ。

くぽぽぽっ……くちゅっ❤
くちゅ、くちゅ、くっちゅ、くぽぽぽっ……。
くっぽ、くっぽ。くっぽ、くっぽ❤
えれれれれ……ちゅ❤
【※8回※　ゆっくり呼吸する。
興奮気味で少しえっちな呼吸。
一度少し休む感じ】
はー、はー。はー、はー……❤
はぁ、はぁ、はぁ、はぁっ……❤
【※しばらく※　耳舐めをする。
深く、激しく、ねっとり舐める。
時折キスや、休む呼吸を交えながら舐めている】
はぁんっ……む……っ❤
んんんふっ……。
ちゅ❤　ちゅ❤　ちゅぽぉぉっ❤
れーろ、れーろ、れーろ、れーろっ……❤
んっふ……ちゅ❤
【※8回※　ゆっくり呼吸する。

だんだんゆっくりになっていく。
一度耳舐めを終了する】
はー、はー……。
はー、はー……っ❤
はぁ……はぁ……。
はぁっ。
はーっ……❤」

〈主人公〉
「はぁっ……❤　はぁっ……❤　はぁっ……❤　はぁっ……❤」

SE22　みつみが動く音
【最初から最後まで流す】
【0―1秒ほど流して、次の『みつみ』のセリフと重ねて流す】
【みつみの声と比べると、やや遠くで聞こえる】

みつみ、そのまま、右耳に話しかける。

●右　0センチ
「【まだちょっと苦しそうに。
同時に、くすくすと嬉しそうに。
主人公の反応がとても可愛らしいので。
なので、主人公が感じている事を指摘する】
ふふ❤　気持ちいい？
めっちゃ顔とろとろ～……❤
【耳にキスする】
ちゅ❤」

みつみ、『右0センチ』の距離のまま、『無声音ささやき』をする。

●右　0センチ　『無声音』ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【ひそひそと。
甘く、優しく。
※特に聞き手をドキッとさせる感じでお願いします※】
可愛いね。好きだよ……❤
ほぉら。口開けて……❤」※

みつみ『正面　０センチ』に移動し、主人公にディープキスする。

ＳＥ２３　みつみが移動する音
【最初から最後まで流す】
【０―１秒ほど流して、次の『みつみ』のセリフと重ねて流す】
【みつみの声と比べると、やや遠くで聞こえる】

●正面　０センチ
「【※しばらく※　キスする。
軽く唇が触れるだけのキスから、だんだんねっとりしたディープキスになる】
ちゅ❤　ちゅ❤　ちゅ❤
あんむ……ちゅ❤　ちゅ❤　ちゅ❤
れぇろ、れぇろ、れぇろ……ちゅっ❤
【※息づかいのみ※　で表現する。
少し苦しくなって、呼吸が漏れる】
んっふ……。
【※再びしばらく※　キスする。

すぐにねっとりした、唇を吸うディープキスになっていく】
ちゅ❤
んんんぅ……んっふ❤
ちゅっ❤　じゅるるるっ❤
はぁっふ……❤
ん❤
ちゅ❤　ちゅ❤　ちゅっ❤　ちゅるるるっ❤
【※6回※　ゆっくり呼吸する。
だんだんゆっくりになっていく。
キスを終了する】
はぁぁ、はぁ、はーっ……❤
はー、はー……っ❤
はーっ……❤」

みつみ、『正面　0センチ』の距離のまま、『無声音ささやき』をする。

●正面　0センチ　『無声音』ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【くすくすと嬉しそうに。

明らかに欲望を煽っている感じで】
一杯気持ち良くなっていいんだよ……❤」※

〈主人公〉
「っ……❤」

このようにして主人公がなすすべもなく好きにされていると、みつみが、ふと何かに気づいた様子で微笑んだ。
どうやら、先ほどから右耳ばかりを攻めていて、左耳はほったらかしにしていた事について、申し訳なく思っているらしい。

●正面　0センチ
「【ふと気づいた感じで。
『こっち』とは、左耳の事を言っている】
あ～……こっち淋しかったね……❤」

みつみ『正面　0センチ』から『左　0センチ』に移行しながら話す。

●正面　０センチ～左　０センチ
「【移動しながら話す。
当然、移動中は距離が開いてＯＫ】
こっちもしようね……❤」

みつみ『左　０センチ』に移行し終わり、耳舐めを始める。
主人公の両耳は、今日もこの通り、満遍なく犯される事となる。

●左　０センチ　『耳舐め』
「【※しばらく※　耳舐めをする。
右耳の時と流れは同じだが、右耳の時よりも、最初から一段階激しい感じ。
まずは軽く耳の外側を舐めていく。
時折キスや、休む呼吸を交えながら舐めている】
んんん……。
つつつつ……ちゅるっ❤　ちゅるっ❤
れーろ、れーろ、れーろ。
れろ、れろ、れろ。
ぺろぺろ、ぺろぺろ、ぺろぺろ……ぴちゅっ❤

んっ……❤　ちゅ❤

【※6回※　ゆっくり呼吸する。
興奮気味の呼吸】

はー、はー、はー。

ふーっ、ふーっ、ふー……❤

【※しばらく※　耳舐めをする。
耳舐めを再開する。
再び、耳のふちを舌でなぞって舐める所から。
まだ優しく穏やか目な舐め】

あんっふ……❤

つつつつ……れーろっ……❤

れーろ、れーろ、れーろ。

……ぺろっ❤

れろれろ……れろれろ……れろれろ……。

れぇーろっ……❤

【耳にキスする。
軽く、戯れる感じ】

ちゅっ❤　ちゅっ❤　ちゅっ❤　ちゅっ❤

ちゅーるっ❤　ちゅぱぁっ❤
【耳のふちを、はむはむする。
時折キスっぽい音も漏れる】
んんっふ……ちゅぱっ❤　ちゅっぷ❤
はむ、はむ、はむ。
……ちゅ❤
れぇぇろ……ちゅっ❤
【※1回※　とてもゆっくり呼吸する。
ちょっと息をつく感じで】
ふうううう……❤
【※しばらく※　耳舐めをする。
耳舐めを再開する。
段々深く、激しくなっていく。
主人公の反応を見ながら、段々容赦なくなっていく感じで。
耳のふちから移動して、だんだん耳の穴の中を積極的に舐めていく。
時折キスや、休む呼吸を交えながら舐めている】
ああんふ……くぽぽぽ……ちゅるっ❤
くぽぽぽ、じゅるるる、じゅるっ❤

ぴちゃぴちゃ、ぴちゃっ❤
ちゅっぽ、ちゅっぽ、ちゅっぽ、ちゅっぽ❤
えれれれ……ぽっ❤
れーろ、れーろ、れぇろ、ちゅぽっ❤
えれれれれ……くぽっ❤
ちゅ❤　ちゅ❤　ちゅ❤」

みつみ、『左０センチ』の距離のまま、『無声音ささやき』をする。

●左　０センチ　『無声音』ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【くすくすと嬉しそうに。
ちょっとからかう感じで。
主人公が、明らかにもっとしてほしそうな感じなので】
んん～……？
何？
して欲しくなってきちゃった～……？」※

〈主人公〉

「もぉおっ……❤　みつみ姉ちゃんがこんなことするからじゃん……❤」

そして案の定主人公は、耳だけでは足りなくなってしまった。
だが、主人公が涙目で指摘しても、なおみつみは嬉しそうだ。
『まさしく望みの展開になった』と言わんばかりに、さらに意地悪を言ってくる。

みつみ、次は『左　0センチ』の距離のまま、ささやかずに話す（有声音ささやき）。

●左　0センチ
「【にやにやと嬉しそうに。
主人公の指摘を、すんなり認める】
そうだよ～❤
私がこんな事したせいで。
さっきから足。
きゅーってなってるもんね～……❤」

みつみ、『左0センチ』の距離のまま、『無声音ささやき』をする。

●左　0センチ　『無声音』ささやき　※マークのセリフまでささやく

「【くすくすと嬉しそうに。
ちょっとからかう感じで】
したいんでしょぉ。
【急に優しく。
ひとつ前のセリフとギャップがあってドキッとさせる感じで】
違う……？」※

〈主人公〉
「……❤」

主人公が小さく頷くと、みつみが目を細めて笑った。
みつみは基本的には理想の管理人であり、頼れる存在だ。
だが、主人公の事になると、少々常軌を逸しているところがある。
それはおそらく、少々遠距離恋愛をしていた期間が長いからだろうと、主人公は推測している
これを思うと……主人公はそれがちょっと普通じゃない行為であっても拒めず、それどころか、進んで受け入れてしまうのだった。

なぜなら……好きな人が自分をこんなにも好きなのだと実感する事は、たまらなく嬉しく、この上なく幸せな事だからだ……。

●左　0センチ

「【※3回※　耳にキスする。
軽く、戯れる感じ】
ちゅ❤　ちゅ❤　ちゅ❤
【にやにやと嬉しそうに。
主人公が認めた事が嬉しいので】
か〜わいい……❤
素直だね❤
【インターネットで見ただけの、あまり根拠のない情報を述べる。
これを話す事で、主人公の罪悪感を和らげようとしている】
何（なん）かね。人間、疲れてると性欲増すらしいよ。
毎日バイト頑張ってるもんねぇ……❤」

みつみ、『左0センチ』の距離のまま、『無声音ささやき』をする。

●左　0センチ　『無声音』ささやき　※マークのセリフまでささやく

「【※マークまで、わざとゆっくりめに。
優しく誘惑する感じで。
主人公をその気にさせるためのダメ押し】
だから、なーんにもおかしくないよ❤
いいんだよ……❤
気持ち良くなりたいって思っても……❤」※

SE24　みつみが移動する音2
【最初から最後まで流す】

みつみ『正面　0センチ』に移動し、主人公に覆いかぶさって、見下ろす状態になる。
みつみ、そこからまた主人公にキスする。

●正面　0センチ
「【※1回※　キスする。
軽くふれるだけのキス】
ちゅ❤」

みつみ、『正面　０センチ』の距離のまま、『無声音ささやき』をする。

●左　０センチ　『無声音』ささやき　※マークのセリフまでささやく

「【※マークまで、わざとゆっくりめに。
くすくすと嬉しそうに。
主人公が誘惑に乗ったので、とても嬉しい】
じゃあ……も～っと……。
しよっか❤」※

ここでフェードアウトして終了。